



和牛甲子園 通信

高校牛児のみなさん、こんにちは!!和牛甲子園事務局です。
 今回は新たな仲間となる初出場校5校の大会に向けた熱き思いをお届けします。
 また、審査委員インタビューは日本食肉格付協会 芳野専務理事、独立行政法人家畜改良センター鳥取牧場 河村場長、東京都立瑞穂農芸高校 伊勢教諭、公益社団法人全国食肉学校 小原学校長の4名の皆様から、高校牛児への激励の言葉をいただいておりますので、合わせて報告します。

つかめ、初勝利! みせろ、和牛への思い! 水戸農業高校の新たなるチャレンジ!



インタビューをお願いしたの2年生仲良し3人組
 初出場・初勝利を目指して!! 勝利のポーズ!!



張ヶ谷さん

佐藤さん

阿久津さん

- Q. 水戸農業高校の紹介をお願いします。
- A. 生徒数と学校の敷地面積は県内No.1で、歴史の長さは県内No.2の伝統校です。生徒数が多いのは、学科数が多いためで、伝統に裏打ちされた多様な学びの花咲く学校です。
- Q. 出場の経緯を教えてください。
- A. 和牛甲子園は開始時より興味があり、準備を進めてきましたが、今回、多数の関係先の協力により、念願かなっての初出場です。そんなことで、一同、新たなチャレンジに燃えて、張り切っています(笑)。
- Q. 部活動として出場されますが、メンバー数や特色等を教えてください。
- A. 約20名のメンバーで活動しており、2年生が中心となり、部を引っ張っています。
- Q. 今日はそんな2年生の女性部員の3名の皆さんから、まず初出場に向けた意気込みをお願いします。
- A. (張ヶ谷さん)日頃、我がこと以上に牛に向き合い・牛に親しみ、かつ牛に癒される牛中心の生活です。今回は念願の初出場!気合入りまくりです(笑)。
 (佐藤さん)茨城魂、地元愛、牛への愛は負けません。出場するからには上位を狙ってます(笑)。
 (阿久津さん)生き物に関わる責任を果たすため、常にベストを尽くしていますので、結果は自ずととついてくるものです。好結果なら、最高です(笑)。わが校の伝統と底力をみせたいです。
- Q. 牛中心の3人の学校生活ですが、そのほかに楽しみ等はどのようにですか。
- A. (張)3年生の学校収穫祭時は、3年生の特権で、特別に豚肉を解体して他の学年にふるまいます。すごく名誉なことでもあり、待ち遠しいですね。
 (佐)私は3年次の研究活動です。いまからテーマをいろいろ考えていますが、ワクワク(笑)です。
 (阿)私は校外での販売活動です。購買される方の反応は刺激的です。日頃の学習とは一味違います。
- Q. 将来の進路・希望など教えてください。
- A. (張)牛関係の職業に就きたいと思いますが、肥育と酪農で揺れ動いています(笑)
 (佐)私も 肥育と酪農どっちにするか悩んでいます。インターンも経験しましたが、悩ましい…。
 (阿)もともと家業であったので、和牛の肥育を自ら立ち上げたいです。起業ですね。
- Q. では最後に全国のライバル牛児へのメッセージをお願いします。
- A. (張)牛への愛は他校には負けません。愛する牛とわが校の伝統と実力を見せたいです。がんばります。
 (佐)出るからには、賞を持ち帰りたいです。がんばっぺ、和牛! がんばっぺ、水戸農業!
 (阿)お互いに全力を尽くして頑張りましょう。ただし、こちらも、本気で行きます。手加減しませんよ(笑)

創り出そう、新たな取組と名産品 「和牛への思い」から広がる活動 吾妻中央高校の新たな取り組み



吾妻中央高校 動物科学研究部全員集合!!



**今回インタビューをお願いした3年生の皆さん
左から 二口さん 狩野さん 田中さん**

後ろの2頭は第7回大会の出品候補牛!!

Q. 吾妻中央高校の紹介をお願いします!

A. 美しい自然環境の中、県内では農業科をいち早く設置するなど進取の気象が持ち味の学校です。最近では、学校産の米と学校産生乳100%使用のレアチーズが評判となる等、六次産業化に取り組んでいます。

Q. 初出場の経緯は?

A. わが校では、すでに地元JAと連携した六次産業化に取り組んでいますが、新たに和牛肥育に取り組むことで、六次産業化や地域振興といった様々な波及効果が教育活動から生まれます。この食の教育活動の一環として、和牛甲子園への参加をめざしてきました。

Q. その取組を支える主体は、部活動でしょうか?授業でしょうか?

A. 部活動を主体にしながら、授業で補うよう取り組みを進めます。こちらも新しい試みです。

Q. 和牛に慣れ親しみ「和牛LOVE」がひととき強い3年生の皆さんから、この3年間はどんなものでした?

A. (狩野さん)学年を経るに従い、和牛への可愛さ、愛情が増し、「和牛への愛情」は人一倍強いです(笑)。

(二口さん)入学時、和牛は「大きくてこわいなあ〜」というイメージでしたが、今ではすべての和牛の特徴・個性が頭に入り、慣れ親しんでいます。生き物、特に和牛はかわいくて、愛おしいですね(笑)

(田中さん)3年生ともなると、牛から近寄ってきてくれます(笑)。ほんとにかわいい存在です。

Q. 活動で特に好きなことはありますか?

A. (狩)ブラッシングです!!!リラックスするときの和牛の様子は癒されますし、ますます「牛LOVE」が高まります。

(二)乳しぼりです。牛の機嫌が悪いとケリをくらうものの、牛のすべてがわかるような特別な瞬間です(笑)

(田)和牛と思いが通じて「一体感」を感じることです。これは飼育・調教を含めた生き物を飼う醍醐味です。

Q. この3年間で、飼育を通して皆さんに起きた変化等ありましたら教えてください。

A. (狩)入学当初から比べると、驚くほどすべての生き物に対して、関わり方が変わりました。なかでも、和牛に夢中で、「沼」状態です。将来は動物の飼育にかかわる仕事をしたいと考えています(笑)。

(二)将来は設計関係の進路を希望していますが、この三年で細部にも配慮しながら、順序立てて物事を進める姿勢が身に付きました。

(田)入学以来、いろいろ経験を積んだことで、精神的に成長して、何事にも積極的になりました。

Q. では最後に、大会に向けた抱負・ライバルへのメッセージなどをお願いします。

A. (狩)初出場ですが、一生懸命全力でぶつかっていきます!!私たちは手強いので、覚悟してください(笑)。

(二)和牛甲子園初参加で、身が引き締まる思いです!!まだ未熟ではありますが、ついに高校牛児の仲間入りです!よろしくお願いします。

(田)高校生活の総仕上げ、共に学んだ仲間と全力でラストスパートです!!

初出場ですが、ここまで続けて来た取り組みの成果をしっかりと発表できるよう、最後まで頑張ります。

想定を上回るスピードで進む学校での肉質改善

枝肉評価部門 審査委員長 芳野先生が語る

枝肉から見る和牛甲子園の現在と高校牛児へのアドバイス



第4回から枝肉評価部門
審査委員長を歴任!!
日本食肉格付協会
芳野専務理事

Q. 先生は第4回大会から枝肉評価部門の審査委員長として参加いただいています。

これまでを振り返った感想などお願いします。

A. これまで2回審査を行いました。出品牛は一般の生産者と比較して遜色ありません。それどころか、ここ2年の改善度合いは、一般の生産者を上回るスピードであったと考えています。

Q. 和牛甲子園の上位入賞牛は、一般生産者の共励会でも上位入賞を狙えるレベルでしょうか。

A. 十分、上位を狙える品質のレベルです。第5回和牛甲子園の枝肉評価部門の最優勝賞だった鹿児島の高校の枝肉や、優秀賞となった岐阜・愛知・鹿児島各校の出品牛なども、上位入賞が可能だと思います。第4回大会に続き、出品牛のレベルの高さには感心しています。大会を経るに従い、全体のレベル向上がスピードアップしています。

Q. そんな成長を続ける高校牛児に飼育でのアドバイスはありますか。

A. 野球の甲子園とも通じますが、「基本に忠実に」ということだと思います。

基本は、素牛のもつ能力を100%発揮させるには、どうしたらいいかを常に考えて、日々の牛の飼育をおこなうようにしたいと思います。

Q. 先生の持論ですね。高校生に向けにもう少しわかりやすく解説をお願いします。

A. まずは、しっかり食べることができる「胃袋」づくり。その上で、しっかり・着実に飼料を食べさせて、ストレスのない健康的な状態で出荷する。こうすれば、枝肉重量は着実に増加し、自ずとロース芯も太く・バラも厚い、無駄脂肪のない産肉量の多い牛となります。

Q. それに加えて、もうワンポイント、アドバイスをお願いします。

A. 出荷にあたり「瑕疵をどれだけ減らせるか」を念頭に置いて、活動に励んでほしいです。

瑕疵の多くは、アタリとシコリですが、アタリは飼育管理で抑え込むことができます。

日々の飼育活動を濃密におこなうことで、アタリの多くが未然に防止できます。徹底してロスをなくすよう知り組んでください。

Q. では、最後に高校牛児へ激励のメッセージをお願いします。

A. 和牛甲子園では、まず、自らの出品牛をよく検品してください。その上で、絶好の機会ですので、多くの学校の枝肉を見てください。また最優秀賞の枝肉は必ず見てください。その上で、ライバルと比べて、何が足らなかったか考えて、次の取組につなげてください。「枝肉は嘘をつかない」。努力は必ず枝肉に現れます!!1月に品川でまっています!!

とどけ、千年の都から送る熱き情熱! 3年間の集大成 京都府立農芸高校の挑戦



畜産流通コースを引っ張る 3年生8名の皆さん



畜産流通コース2,3年生全員集合!!

Q. 京都府立農芸高校の紹介をお願いします。

A. 京都府唯一の農業専門コースのみの「農業系高校」で、畜産を学べる唯一の学校です。畜産以外にも、グローバルギャップ取得等の先進的な取り組みを積極的におこなっています。

Q. 初出場の経緯は?

A. 学科変更後の第一期生ということで、3年間授業で苦楽を共にした仲間との学習成果の総決算として、和牛甲子園へ挑戦しました。ここ2回のweb開催大会の内容を参加者全員で見て、今大会にむけたモチベーションを高め、学習成果を練り上げてきました。

Q. 3年間学んだ学校生活はどんなものでしたか?

A. 毎日家畜とふれあい、生命と親しむという、得がたい体験に恵まれ、毎日たのしい学校生活でした。牛はそれぞれ個性があり、牛の性格がわかってくると、ふれあい方も変わってきます。牛とふれあいの毎日は、楽しくてしょうがないです(笑)

Q. 部活動ではなく、授業の取り組みということですが、牛の飼育は分担・交代制でしょうか?

A. 全員で8人チームで仕事を分担しています。

Q. この3年間での皆さんの取組内容や取組姿勢、牛への思いに変化などありましたら教えてください!

A. (岸本さん)大会が近づくにつれて、目標も定まり、一致団結!!今では、完全に自主的・自発的な活動です。

(亀田さん)仲間とのコミュニケーションを一番に、全員で家畜の飼育に励んでいます!!

(竹田さん)ゴールの和牛甲子園にむけて、全員の目標一致・意志も固まり、仲間の団結力を感じます!

(山口さん)毎日の活動で、一つとして同じものではなく、日々変化、日々発見、日々新鮮です(笑)!

(富田さん)ですが、大好きな牛が出荷されるとなると、さみしい以上に複雑な気持ちにも襲われます…

Q. 最後に3年生全員から、大会に向けた抱負・将来の目標・ライバルへのメッセージなどをお願いします!!

A. (岸本さん)自分にとって和牛甲子園は「はじまり」です。京都の牛の素晴らしさと知名度を上げる取り組みを将来も続けます!!東京ではコロナ禍で苦労した高校牛児と健闘を讃えたいです。

(亀田さん)「銀の匙」で農業および農業学校と農業教育に興味をもってこの学校に入学しました。将来も牛関係の仕事の続けたいと思います。最後まで頑張り抜きます。

(竹田さん)目指すは初出場!初優勝!!です。私の進路は畜産ではないですが、学校で学び、仲間と苦労して得た経験を活かして、これからも頑張ります!!

(山口さん)コロナ禍の中、ともに苦しい中を頑張った全国の仲間と同じ舞台上で競い、交流するのが楽しみです。学校で学んだこと活かし「食」にかかわる仕事で社会に貢献していきたいです。

(富田さん)大会にむけてやり切りました!!あとは楽しみたい!!もう少しで出荷となりますが、最後までしっかりと育て上げたいです。将来は、この3年間の経験を活かしつつ、牛のことを世の中に広めていきたいと思っています。

(荒井さん)和牛甲子園を目指して3年間努力してきました。最優秀賞めざして頑張ります。

(松島さん)目標に向かって和牛と仲間と「ONE TEAM」で成長してきました。

(仲江さん)多くの方々の支えがあってここまで来れました。恩返しできるように頑張ります。

先進テーマと熱意溢れる体験発表会!

枝肉は一般生産者も“舌を巻く”高水準!

取組評価部門・枝肉評価部門 両部門の審査委員 河村場長 「高校牛児と甲子園の成長」大いに語る!!



第3回大会より審査委員として共感をよせ高校牛児を見守る!
独立行政法人家畜改良センター 鳥取牧場 河村場長

Q. 河村場長は、取組評価部門・枝肉評価部門の両方の審査委員を第3回大会から歴任されており、言わば両部門の歴史の立会人であり目撃者ですが、場長からみて3年の推移はどんなものでしたか。

A. 体験発表会は、どの学校も牛づくりに対する熱意が溢れている中で、先進テーマや地域性を織り込んだ「光る」ものが増えてきた印象です。特に常連校は、聞き取り易さを含めてポイントを分かり易くアピールしたり、ユニークに仕上げたり、「うまい!」ですね。一方で、「慣れることない、初々しさ・実直さ」も失ってほしくありません。それぞれの学校が取組ポイントを見つけてひたむきに頑張る今の体験発表会のあり方に強く共感しています。

枝肉評価部門では、正直、一般生産者が舌を巻くほどの高い水準に届いていると感じています。

審査委員も4年目となり、今では、高校牛児を自分の子供のように感じています(笑)。

Q. では、枝肉評価部門については、どうでしょうか。

A. 生徒の皆さんが毎日協力し、牛や飼槽、水槽、牛床等の観察、手入れなど、大切に管理されていることが分かります。ただ、ここまで生産技術のレベルが高くなると、少し欲張りな希望ですが、より新しい、高校生ならではのチャレンジもしてほしいと思っています。

私の職務と重なるのですが、和牛改良の世界では、これまで中心であった「脂肪交雑」の改良が進み、新たな和牛肉の魅力に関する価値・評価基準を創る段階にあります。すでに脂肪の質や地域資源の活用に取り組んでいる学校も見られますが、サシの形状や赤身の質、肥育期間とコストなども含め、「そんな発想もあったか!」と大人も驚くような取組にも期待したいです。指導にあられる先生は大変でしょうが(笑)。

Q. 3年ぶりの実開催にむけた期待をお願いします。

A. 私自身も、この2日間を楽しみにしているファンです(笑)。高校牛児の皆さんとの交流を今から心待ちにしています。刺激を受けるには、直接の交流に勝るものはありません。

Q. 高校牛児へ激励のメッセージをお願いします。

A. 和牛甲子園での各校の取組について、興味深くも、楽しく見させていただいています。今回も情熱と楽しさ溢れる「取組発表」と、結晶である「枝肉」を楽しみにしています。

また、高校牛児の皆さんには、願わくば、肉牛と畜産、畜産に関連する様々な産業等に、これからも関心を持ち続けていただけると嬉しいです。牛愛は永遠です!!

「こだわり」「特色」の倶知安農業高校 -先輩の取組と地元の特性を生かして-



写真は 畜産班の中の5名の皆さん

南川さん 内田さん 南谷さん 野沢さん 横山さん



Q. 倶知安農業高校の紹介をお願いします。

A. 全校生徒が400名弱と、規模は大きくありませんが、生徒にまとまりがあり、違う班でも協力し合える仲の良いアットホームな雰囲気ある学校です。毎年実施している収穫祭は、学校のみならず地域の大きな呼び物で授業の収穫物等を利用した店頭販売も好評で、毎週行われています。北海道の大自然に囲まれ、他の学校ではできない濃密な体験ができます。

Q. 初出場の経緯を教えてください。

A. 校外の生産者からの紹介で和牛甲子園を知り、これは出場全国の農業高校生徒との交流ができる貴重な経験になると思い、申し込みました。肉用牛では、他の類似の大会がなく、和牛甲子園が唯一無二の機会です。

Q. 和牛の飼育に取組でどんな印象をお持ちですか。

A. (南川さん)家畜を飼うのは初めての経験で、知らないことばかりでとにかく大変な作業でした。
(野沢さん)牛の体重測定は大変でしたが、牛も自分自身も怪我をしないよう注意して作業を行いました。子牛は外で走り回ってしまうので、捕まえるのが大変でした。
(南谷さん)牛をひくのが大変でした。牛は敏感な生き物です。緊張感を持ちつつ自信をもってリードすることが大事だと思います。加えて、防寒対策です。北海道は特に冷えるので11月頃からはジェットヒーターも点けています。

Q. 管理の特色やこだわりがあればお聞かせください。

A. (南谷さん)地域副産物の利用と生産費低減を図るため、先輩たちの研究結果を発展させ、じゃがいもデンプン粕のサイレージ化を図り、給与しています。じゃがいもデンプン粕サイレージは水分が高いため、脱水したのち、飼料米とフスマと混合して水分調整することで廃汁が低減し、冬期間でも凍らずに使用できるようになりました。
(横山さん)今回の和牛甲子園出場牛は、初めてじゃがいもデンプン粕サイレージを給与した牛なので、給与効果に期待しています。

Q. 将来の夢や目標をお聞かせください。

A. (内田)今年は農業クラブの全国大会に出場し、優秀賞を獲得できました。(北海道は他県と違い、2年生が発表する翌1月の北海道大会が予選会となる。)現1年生のためにも全国大会をめざし、しっかりと取り組みたいと思います。
(横山)将来は、酪農学園大学に進学し育種・改良を学び、家畜改良に携わりたいと考えています。
(南谷)畜産とは関係のない進学を考えていますが、畜産を通じて経験したこと、得た知識はどの分野でも十分に生かせると自信を持っています。

教育現場の要望にかなった「機会・場」の提供

取組評価部門 審査委員 伊勢先生が語る

教育現場からみた和牛甲子園の意義



教員代表として、第1回大会
は事務局として参加、第3回
から取組評価部門審査委員
を歴任
東京都立瑞穂農芸高校
伊勢教諭

Q. 先生は第1回大会の事務局メンバー、第3回大会からは取組評価部門の審査委員として和牛甲子園に関わっておられますが、和牛甲子園が定着し、参加校が増え続けている理由は？

A. 教育現場のニーズにうまく合致しましたね！
高校教育界には、サイエンスの側面が強い研究発表の場はありますが、和牛甲子園ほど生産面と密着した体験発表の場はありませんでした。教育界からすると、「絶好の機会を作ってくれた」というのが正直な感想です。但し、定着と参加校の拡大のペースは想定外でした(笑)。
その原動力は、やはり参加生徒の「熱意」です。

Q. 現在も参加学校が増え続けているのは、そこに理由があるのですね。

A. 生徒の成果披露の場としては、これ以上ない目標です。個人的には、「養豚甲子園」も、企画してほしいです。こちらもやりませんか(笑)?!

Q. そんな「和牛甲子園」ですが、ほかにも同種の企画と違う特色はありますか？

A. 何とんでも、生徒が出荷した成果物の内容を自ら確認できる、しかも専門家の解説付きです。さらに、その成果物の値段が決まるセリに参加まで可能なところ。学校の取組としては、農畜産物は「出荷したら終わり」というのが、まだまだ大半です。その中で、家畜の出荷後にも着目しているのは、「全農」らしいユニークな視点だと思います。

Q. 高校教育界での「養牛」での今のトレンド等教えてください。

A. 「スマート農業」への取組です。文科省や農水省の後押しもあり、「牛温計」「ファームノートカラー」等は既に多くの学校で導入しています。

Q. 全農でも大会説明とあわせて最新技術の披露の場として「和牛アカデミー」を開催していますが、いかがでしょうか。

A. その「和牛アカデミー」ですが、実は「隠れファン」です(笑)。提示される資料の内容も示唆に富んだ興味深いものが多いです。願わくば、現在は年1回ですが、年2回程度開催してもらえると、さらにうれしいですね。

教育現場は、「本当に使える情報」を常に欲してしまいますので、ご協力をお願いしたいです。

Q. では、最後に高校牛児へ激励のメッセージをお願いします。

A. 3年生は卒業前の最後の大舞台、1・2年生は何かをつかむ絶好のチャンスです。目標めざして、最後までベストを尽くしてください。また、卒業後も和牛甲子園参加による高校牛児の輪を「つたえる・つなげる・ひろげる」ようお願いします。

とわの森三愛高校 飼育開始4年目の挑戦

—江別から送る、あらたな息吹とこころみ—



今回のプロジェクトメンバーの皆さん

小林さん

小松さん

田中さん

堀川さん

吉田さん

Q. とわの森三愛高校の紹介をお願いします。

A. 1991年4月に「酪農学園大学附属高等学校」と「とわの森三愛高等学校」が統合し、普通科・英語科・酪農経営科の3学科の学校として開校しました。全校生徒は通信課程を含めて1000人以上の規模を誇り、様々な分野を学べる体制が整っています。

Q. 初出場の経緯を教えてください。

A. 4年前から和牛飼育に取り組んでおり、これまでの活動を総括して、今後につなげていく活動にしたいという思いから、班員と相談して出場することにしました。

Q. 取組内容や取組姿勢等について教えてください。

A. (西川先生)生徒にとって、朝の管理実習は負担が大きいです。毎日牛舎に行くことで、小さな変化に気付くことができます。これは、良い学びになります。

(新海さん)朝夕牛舎実習や他の活動でもホルスタインに関わるが多かったので、肉用種である黒毛和牛の飼養管理に取り組むのはとても新鮮なことでした。

(吉田さん)和牛の毛色や状態を見て飼料をこだわってみたり、試行錯誤をしながら取組ました。初めて和牛に携わって何も知らない中でのプロジェクトでしたが、大学生や先生方に知識を教てもらいながら頑張る事ができ、いい経験を積むことができました。

Q. 将来の夢や目標をお聞かせください。

A. (新海さん)将来は酪農に関わっていくつもりです。その中で今回のプロジェクトで培われたものが、これからの農業にどう生かしていけるか、楽しみです。

(吉田さん)自分の家業である酪農家を継ぎたいと考えているので学校で教わった技術などを活かして地域農業を盛り上げていきたいです。

(小林さん)将来は、実家の牧場を継ぐことが夢なので、そのために、現在機農で学んでいます。畜産や総合実習で酪農について学び、高校卒業後は他の牧場で就職をし、実家の牧場を継ぐための準備をしていきたいです。継いだあとも、両親が日々努力してきた牧場を無駄にせず、より良い経営を目指して頑張っていきます。

Q. 初出場に向けた意気込みをお願いいたします。

A. (新)今年で四年目となりましたが、まだまだ駆け出したばかりのプロジェクトです。先々の不安はありますがそれ以上にこれからの繋がりに期待を持っています。

(吉)小さな積み重ねが大きなものになるので焦らず飼育していきたい。

(小)先輩が続けてきたプロジェクトを私達2年に引き継がれますが努力を無駄にすることなくこの先も頑張っていきます。

和牛への熱い思いと真剣な取り組み、 そして 全国の仲間との切磋琢磨

取組評価部門 審査委員 小原先生からみた

和牛甲子園と高校牛児 成長の軌跡



第1回大会から取組評価部門
審査委員を務める最古参の審
査委員会メンバー!!

公益社団法人全国食肉学校
小原和仁 専務理事 学校長

Q. 先生にとって和牛甲子園とそこに参加する
高校牛児とはどんな存在でしょうか。

A. とても眩しくてカッコいい存在です。
自らの高校生時代を振り返り、比べると、
ちょっと恥ずかしいくらいです。

Q. 先生からみた和牛甲子園そして高校牛児の
この5年のあゆみについて、教えてください。

A. 第1回目のときに取組発表のレベルの高さ
に驚き、また発表者の笑顔やその堂々とし
た態度に感動しました。そして、回を重ねる
ごとに出場校が増え、さらなるレベルアップ
につながっています。正直凄いです。

Q. 和牛甲子園そして高校牛児の成長の理由は
なんだと思われませんか？

A. 牛が大好きで牛のことを真剣に考えているから、
仲間と共に一つのことに打ち込んでいるから、そ
して他の高校の生徒と大いに切磋琢磨している
からだと思います。

Q. 3年ぶりの実開催に向けての期待をお願いします。

A. オンラインの良い部分は一定理解していますが、やはり実際に集い交流し理解しあう
ことは何のものにも代えがたい貴重な体験であり、財産です。

Q. 高校牛児へメッセージをお願いします。

A. 皆さんが共に協力し合って打ち込んだことを自信を持って発表してください!

高校時代にベストを尽くしたことは一生の財産です。

将来どんな仕事に就いても必ず生きてきます。皆さんの未来に期待しています。

公益社団法人 全国食肉学校

設立から49年の食肉分野における、わが国で唯一の公的な職業能力開発校です。お肉の生産から
調理にいたるまでの知識を問う「お肉検定」も開催しています!

和牛甲子園webサイト

<https://wagyu-koushien.com/>

